

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 — 2013年(平成25年) —

永野喬子 境田昌江¹⁾ 三浦美穂²⁾ 吉野修司²⁾ 大浦裕子³⁾ 竹井正行

Summary of the 2013 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Kyoko NAGANO, Masae SAKAIDA, Miho MIURA, Shuji YOSHINO, Yuko OHURA,
Masayuki TAKEI

要旨

2013年に県内では全数把握対象78疾患中、23疾患が報告された。疾患別では結核242例、腸管出血性大腸菌感染症94例、風しん25例の報告が多かった。全国的に流行した風しんは、県内でも全数把握になった2008年以降最も報告数が多かった。また、2013年3月4日から重症熱性血小板減少症候群が新たに全数把握対象疾患に加わり、県内では7例報告された。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年と同程度、例年の約0.9倍、全国の約1.5倍であった。眼科及び基幹定点報告疾患の報告総数は、前年の約1.6倍、例年の約1.4倍、全国の約4.8倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年と同程度、例年の約0.8倍、全国の約0.6倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年と同程度、例年の約0.9倍、全国の約1.1倍であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1999年(平成11年)より宮崎県感染症情報センターとして、感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における2013年(平成25年)の患者発生状況をまとめたので報告する。

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で定められた109疾患を調査対象とした。

指定届出医療機関(以下「定点」という。)は、感染症発生動向調査事業実施要綱¹⁾に基づき選定

した(表1)。

2 調査期間

全数把握対象疾患については2013年1月1日から12月31日まで、定点把握対象疾患については2013年1週から52週まで、インフルエンザについては2013/2014年シーズンの2013年41週から2014年14週までをそれぞれ調査期間とし、いずれの疾患も診断日をもとに集計した。

表1 保健所別指定届出医療機関(定点)数

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	5	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	59	36	6	7	13

企画管理課 ¹⁾現 都城保健所 ²⁾微生物部 ³⁾元 衛生環境研究所

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1)一類感染症

報告はなかった。

2)二類感染症

急性灰白髄炎 1 例，結核 242 例が報告された。

a)急性灰白髄炎 Poliomyelitis

報告数は 1 例で，ワクチン由来株であった。宮崎市保健所からの報告であった。患者は 1 歳の男児で，主な症状として弛緩性麻痺，腱反射の減弱・消失がみられた。ワクチン接種歴はなかった。

b)結核 Tuberculosis

報告数は前年(256 例)と同程度の 242 例で，このうち，肺結核が 110 例，その他の結核(結核性胸膜炎，腸結核，結核性リンパ節炎等)が 54 例，肺結核及びその他の結核が 2 例，疑似症患者が 8 例並びに無症状病原体保有者が 68 例であった。宮崎市(117 例)，都城(34 例)，延岡(32 例)保健所からの報告が多く，性別では男性が 127 例，女性が 115 例，70 歳以上が 137 例と全体の約 6 割を占めており，高齢者の割合が高かった。

3)三類感染症

コレラ 1 例，腸管出血性大腸菌感染症 94 例が報告された。

a)コレラ Cholera

報告数は 1 例で，都城保健所からの報告であった。患者は 60 歳代男性で，主な症状は米とぎ汁様下痢，嘔吐，脱水等がみられた。インドへの渡航歴があった。

b)腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告数は前年(67 例)の約 1.4 倍の 94 例で，このうち，患者が 27 例(うち HUS 発症:1 例(O157))，無症状病原体保有者が 67 例であった。O 血清型別では，O26 が 42 例，O103 が 26 例，O157 が 9 例，O111 が 6 例と多かった(表 2)。宮崎市(60 例)，都城(20 例)，中央(5 例)，高鍋(4 例)，小林・高千穂(各 2 例)及び日向(1 例)保健所からの報告で，年齢別では 1 歳から 4 歳が 46 例，次いで 5 歳から 9 歳が 16 例と多かった。

表 2 O 血清型別報告数

O血清型	報告数
O26	42
O103	26
O157	9
O111	6
O121	3
O136	2
O91	2
O1	1
O115	1
不明	4
計	96 ※

※同一人から 2 種類の型が検出された例があるため報告数より多い。

発生月は 2 月から 11 月で，特に 8 月(20 例)と 9 月(35 例)で全体の約 6 割を占めており，この多くは集団感染事例によるものである。

4)四類感染症

E 型肝炎 1 例，A 型肝炎 1 例，重症熱性血小板減少症候群(SFTS)7 例，つつが虫病 23 例，デング熱 3 例，日本紅斑熱 10 例，レジオネラ症 8 例，レプトスピラ症 1 例が報告された。

a)E 型肝炎 Hepatitis E

報告数は 1 例で，日南保健所からの報告であった。患者は 50 歳代男性で，主な症状として発熱，全身倦怠感，食欲不振，黄疸，肝機能異常等がみられた。

b)A 型肝炎 Hepatitis A

報告数は 1 例で，宮崎市保健所からの報告であった。患者は 30 歳代女性で，主な症状として全身倦怠感，発熱，食欲不振，黄疸，肝機能異常等がみられた。

c)重症熱性血小板減少症候群

SFTS(severe fever with thrombocytopenia syndrome)

2013 年 3 月 4 日から全数把握対象に追加され，報告数は 7 例であった。宮崎市(3 例)，都城(2 例)及び延岡(2 例)保健所からの報告であった。性別では男性 2 例，女性 5 例，年齢別では 50 歳代 1 例，60 歳代 2 例，70 歳代 2 例，80 歳代 2 例であった。主な症状として発熱，全身倦怠感，血小板・白血球減少等がみられた。

d)つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は前年(47例)の約0.5倍の23例で、季節的には例年どおり冬季に多発した。都城(7例)、宮崎市(6例)保健所からの報告が多く、性別では男性15例、女性8例、年齢別では70歳以上が約4割を占めた。主な症状として頭痛、発熱、発疹、刺し口等がみられた。

e)デング熱 Dengue fever

報告数は3例で、宮崎市(2例)、日南(1例)保健所からの報告であった。患者はいずれもアジアへの渡航歴があり、性別は男性2例、女性1例、年齢別では10歳代1例、30歳代1例、40歳代1例であった。主な症状として発熱、頭痛、血小板の減少等がみられた。

f)日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は10例で、全て4月から10月に発生し、宮崎市(6例)、日南(3例)及び延岡(1例)保健所からの報告であった。性別では男性4例、女性6例、年齢別では70歳以上が7例、40歳代から60歳代が3例であった。主な症状として発熱、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常等がみられた。

g)レジオネラ症 Legionellosis

報告数は8例で全て肺炎型であった。宮崎市(5例)、都城(2例)及び高鍋(1例)保健所からの報告であった。性別では、男性5例、女性3例、年齢別では、50歳代1例、60歳代4例、80歳代3例であった。主な症状として発熱、肺炎、呼吸困難、咳嗽等がみられた。

h)レプトスピラ症 Leptospirosis

報告数は1例で、宮崎市保健所からの報告であった。患者は男性で、60歳代であった。主な症状として発熱、結膜充血、黄疸等がみられた。

5)五類感染症

アメーバ赤痢11例、ウイルス性肝炎3例、急性脳炎7例、クロイツフェルト・ヤコブ病3例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症3例、後天性免疫不全症候群8例、侵襲性髄膜炎菌感染症1例、侵襲性肺炎球菌感染症3例、梅毒9例、破傷風4例及び風しん25例が報告された。

a)アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告数は11例で、腸管アメーバ症が10例、腸管外アメーバ症が1例であった。宮崎市(9例)、都城(1例)及び高鍋(1例)保健所からの報告で、性

別では、男性9例、女性2例、年齢別では、20歳代2例、30歳代1例、40歳代1例、50歳代5例、70歳代1例、90歳代1例であった。主な症状として下痢、粘血便、肝膿瘍等がみられた。

b)ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告数は3例で、原因病原体はサイトメガロウイルス1例、B型肝炎ウイルス1例、C型肝炎ウイルス1例であった。いずれも宮崎市保健所からの報告で、性別では男性2例、女性1例、年齢別では30歳代2例、60歳代1例であった。主な症状として肝機能異常、全身倦怠感、黄疸等がみられた。

c)急性脳炎 Acute encephalitis

報告数は7例で、原因病原体はアデノウイルス1例、インフルエンザウイルスA型1例、ヒトヘルペスウイルス6型1例、水痘帯状疱疹ウイルス1例、不明が3例であった。宮崎市(3例)、日南(2例)、延岡(1例)及び日向(1例)保健所からの報告であった。性別では男性5例、女性2例、年齢別では、11ヶ月1例、1~4歳が2例、5~9歳が2例、10歳代1例、50歳代1例であった。主な症状として発熱、痙攣、意識障害等がみられた。

d)クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は3例で、古典型クロイツフェルト・ヤコブ病2例、ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病1例であった。都城(2例)及び宮崎市(1例)保健所からの報告で、患者はいずれも女性で、年齢別では60歳代1例、70歳代1例、80歳代1例であった。主な症状として進行性認知症、ミオクローヌス、錐体路症状等がみられた。

e)劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infections

報告数は3例で、いずれも血清群はA群であった。宮崎市(1例)、都城(1例)及び日南(1例)保健所からの報告で、性別では男性2例、女性1例、年齢別では、50歳代1例、70歳代1例、80歳代1例であった。主な症状としてショック、腎不全、肝不全、DIC等がみられた。

f)後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は8例で、AIDSが4例(指標疾患：ニューモシスティス肺炎3例、カンジダ症及びニュー

モシスティス肺炎 1 例), 無症候性キャリアが 4 例であった。宮崎市(7 例)及び高千穂(1 例)保健所からの報告で, 患者はいずれも男性であった。年齢別では, 20 歳代 2 例, 30 歳代 1 例, 50 歳代 3 例, 60 歳代 1 例, 70 歳代 1 例で, 感染経路は同性間性的接触 3 例, 異性間性的接触 2 例, 不明が 3 例であった。

g) 侵襲性髄膜炎菌感染症

Invasive meningococcal infection

2013 年 4 月 1 日から全数把握疾患に加えられた。報告数は 1 例で, 血清型は Y 群であった。延岡保健所からの報告で, 患者は 80 歳代の男性であった。主な症状として発熱, ショック, 菌血症等がみられた。

h) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal infection

2013 年 4 月 1 日から全数把握疾患に加えられた。報告数は 3 例で, いずれも宮崎市保健所からの報告であった。患者はいずれも男性で, 年齢別では 50 歳代 1 例, 70 歳代 1 例, 80 歳代 1 例であった。主な症状として発熱, 咳, 意識障害等がみられた。

i) 梅毒 Syphilis

報告数は 9 例で, 早期顕症 I 期 4 例, 早期顕症 II 期 3 例, 無症候性 2 例であった。宮崎市(7 例), 小林(1 例)及び日向(1 例)保健所からの報告であった。性別では, 男性 5 例, 女性 4 例, 年齢別では, 10 歳代 1 例, 20 歳代 4 例, 40 歳代 1 例, 50 歳代 3 例であった。感染経路は異性間性的接触が 7 例, 同性間性的接触が 1 例, 不明が 1 例であった。主な症状として梅毒性バラ疹, 硬性下疳等がみられた。

j) 破傷風 Tetanus

報告数は 4 例で, 宮崎市 (2 例), 都城(1 例)及び高鍋(1 例)保健所からの報告であった。性別では男性 2 例, 女性 2 例, 年齢別では 60 歳代 1 例, 70 歳代 2 例, 80 歳代 1 例であった。主な症状として筋肉のこわばり, 開口障害, 嚥下障害, 発語障害等がみられた。

k) 風しん Rubella

報告数は 25 例で, 全数把握対象となった 2008 年以降最も多かった。病型別では, 臨床診断例が 8 例, 検査診断例が 17 例であった。宮崎市(21 例),

都城(3 例)及び日向(1 例)保健所からの報告で, 性別では男性 19 例, 女性 6 例, 年齢別では, 10 歳未満が 1 例, 10 歳代 3 例, 20 歳代 3 例, 30 歳代が 11 例, 40 歳代 6 例, 50 歳代 1 例であった。ワクチン接種歴は 2 回有りが 1 例, 1 回有りが 1 例, 接種無しが 9 例, 不明が 14 例であった。

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は 62,344 人, 定点当たり 1,496.0 で, 前年と同程度, 過去 5 年間の平均値(以下, 「例年」という。)の約 0.9 倍, 全国の約 1.5 倍であった。

各疾患の発生状況の概要は表 3, 経時的発生状況は図 1 のとおりで, その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2013/2014 年シーズンの報告総数は 21,774 人, 定点当たり 369.1 で, 前シーズンの約 1.4 倍, 例年と同程度, 全国の約 1.3 倍であった。流行の時期は例年どおりで, 2014 年第 3 週(1 月中旬)に定点あたり 19.6 と流行注意報レベルを超過し, 翌週の第 4 週(1 月下旬)には定点あたり 37.9 と流行警報レベル開始基準値を超過した。第 5 週で定点あたり 56.1 と流行のピークを迎えた後, 第 14 週(4 月上旬)に終息基準値を下回った。今シーズンの流行の中心となったウイルスは昨シーズンと同じ A 香港型(AH3)で, AH1pdm09 型及び B 型による患者も確認された。延岡(定点当たり報告数 528.6), 都城(427.7), 小林(393.4)保健所の順に報告が多く, 10 歳未満が全体の 61%を占めた。

b) R S ウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は 2,015 人, 定点当たりの報告数は 56.0 で, 前年の約 0.9 倍, 例年と同程度, 全国の約 1.8 倍であった。延岡(131.8), 日向(118.3), 都城(49.2)保健所からの報告が多く, 3 歳未満が全体の 93%を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は 2,561 人, 定点当たりの報告数は 71.1 で, 前年の約 1.9 倍, 例年の約 2.3 倍, 全国の約 3.1 倍であった。日南(197.0), 延岡(98.8), 都城(77.3)保健所からの報告が多く, 1 歳から 4 歳が 67%を占めた。

d) A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は 3,223 人、定点当たりの報告数は 89.5 で、前年の約 0.7 倍、例年の約 0.8 倍、全国の約 1.1 倍であった。延岡(251.3)、日向(132.0)、日南(111.3)保健所からの報告が多く、3 歳から 6 歳が全体の 60%を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は 20,900 人、定点当たりの報告数は 580.6 で、前年の約 0.9 倍、例年と同程度、全国の約 1.7 倍であった。小林(1111.0)、日南(875.0)、都城(570.7)保健所からの報告が多く、1 歳から 3 歳が全体の 42%を占めた。

f) 水痘 Chickenpox

報告総数は 3,949 人、定点当たりの報告数は 109.7 で、前年と同程度、例年の約 0.8 倍、全国の約 2.0 倍であった。日南(209.3)、延岡(120.0)、宮崎市(115.8)保健所からの報告が多く、1 歳から 4 歳が全体の 74%を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 4,044 人、定点当たりの報告数は 112.3 で、前年の約 1.8 倍、例年の約 1.1 倍、全国の約 1.2 倍であった。流行の時期は例年どおりで、第 27 週(7月上旬)に流行警報レベル開始基準値を超過し、第 42 週(10月中旬)に終息基準値を下回った。日向(197.0)、延岡(193.5)、日南(141.0)保健所からの報告が多く、6 ヶ月から 3 歳が全体の 86%を占めた。

h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は 80 人、定点当たりの報告数は 2.2 で、前年の約 0.6 倍、例年の約 0.1 倍、全国の約 0.7 倍であった。宮崎市(3.4)保健所からの報告が多く、6 ヶ月～1 歳が全体の 36%を占めた。

i) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は 1,890 人、定点当たりの報告数は 52.5 で、前年及び例年の約 0.9 倍、全国の約 1.8 倍であった。延岡(69.3)、宮崎市(60.3)保健所からの報告が多く、6 ヶ月から 1 歳が全体の 91%を占めた。

j) 百日咳 Pertussis

報告総数は 7 人、定点当たりの報告数は 0.2 で、前年の約 0.5 倍、例年の約 0.1 倍、全国の約 0.4 倍であった。6 ヶ月～1 歳が全体の 86%を占めた。

k) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は 1,314 人、定点当たりの報告数は 36.5 で、前年の約 0.4 倍、例年の約 0.6 倍、全国の約 1.2 倍であった。流行の時期は例年どおりで、第 30 週(7月下旬)にピークを迎えた。延岡(97.3)、日向(56.0)保健所からの報告が多く、6 ヶ月から 3 歳が全体の 84%を占めた。

l) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は 587 人、定点当たりの報告数は 16.3 で、前年の約 0.3 倍、例年の約 0.2 倍、全国の約 1.3 倍であった。都城(39.0)、日向(21.3)、中央(20.0)保健所からの報告が多く、2 歳から 5 歳が全体の 62%を占めた。

2) 眼科及び基幹定点報告疾患

眼科定点把握対象疾患の報告総数は 897 人、定点当たりの報告数は 149.5 で、前年の約 1.6 倍、例年の約 1.4 倍、全国の約 4.8 倍であった。

基幹定点把握対象疾患の報告総数は 63 人、定点当たりの報告数は 9.0 で、前年の約 0.6 倍、例年の約 0.9 倍、全国の約 0.3 倍と少なかった。また、2013 年 42 週から感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)が基幹定点報告疾患に追加され、本県では報告はなかった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は 2 人、定点当たりの報告数は 0.3 で、前年の約 0.5 倍、例年と同程度、全国の約 0.3 倍であった。患者は 5 歳未満と 40 歳代であった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は 895 人、定点当たりの報告数は 149.2 で、前年の約 1.6 倍、例年の約 1.4 倍、全国の約 4.9 倍と多かった。10 歳未満が全体の 33%を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告総数は 4 人、定点当たりの報告数は 0.6 で、前年と同程度、例年の約 0.7 倍、全国の約 0.6 倍であった。いずれも宮崎市 (4.0)保健所からの報告で、0 歳が全体の 50%を占めた。原因菌は *Streptococcus* Group G が 1 人、不明が 3 人であった。

d) 無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は 33 人、定点当たりの報告数は 4.7

で、前年の約 2.8 倍、例年の約 2.1 倍、全国の約 1.7 倍であった。都城(22.0)、宮崎市(6.0)、延岡(3.0)及び日南(2.0)保健所からの報告で、5 歳未満が全体の 64%を占めた。原因病原体は、Norovirus が 7 人、Rotavirus が 5 人、Respiratory syncytial virus が 2 人、Adenovirus1 人、不明が 18 人であった。

e)マイコプラズマ肺炎

Mycoplasmal pneumonia

報告総数は 25 人、定点当たりの報告数は 3.6 で、前年の約 0.3 倍、例年の約 0.6 倍、全国の約 0.2 倍であった。延岡(15.0)、宮崎市(5.0)保健所からの報告が多く、10 歳未満が全体の 72%を占めた。

f)クラミジア肺炎 *Chlamydial pneumonia*

報告総数は 1 人、定点当たりの報告数は 0.1 で、前年の約 0.3 倍、例年の約 0.1 倍、全国の約 0.1 倍であった。日南(1.0)保健所からの報告で、30 歳代であった。

g)感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告はなかった。

3)月報告対象疾患

性感染症の報告総数は 420 人、定点当たりの報告数は 32.3 で、前年と同程度、例年の約 0.8 倍、全国の約 0.6 倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は 386 人、定点当たりの報告数は 55.1 で、前年と同程度、例年の約 0.9 倍、全国の約 1.1 倍であった。

a)性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は 253 人、定点当たりの報告数は 19.5 で、前年の約 0.9 倍、例年の約 0.8 倍、全国の約 0.7 倍であった。都城(31.5)保健所からの報告が多く、男性が約 6 割、女性が約 4 割で、20 歳代から 30 歳代が全体の 69%を占めた。

b)性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpetic infection

報告総数は 67 人、定点当たりの報告数は 5.2 で、前年の約 0.8 倍、例年の約 0.9 倍、全国の約 0.6 倍であった。宮崎市(10.3)保健所からの報告が多く、男性が約 1 割、女性が約 9 割で、20 歳代か

ら 30 歳代が全体の 67%を占めた。

c)尖圭コンジローマ *Condyloma acuminatum*

報告総数は 18 人、定点当たりの報告数は 1.4 で、前年の約 0.8 倍、例年の約 0.5 倍、全国の約 0.2 倍であった。宮崎市(3.3)保健所からの報告が多く、男性が約 6 割、女性が約 4 割で、20 歳代が全体の 44%を占めた。

d)淋菌感染症 *Gonorrhea*

報告総数は 82 人、定点当たりの報告数は 6.3 で、前年の約 1.2 倍、例年の約 0.8 倍、全国の約 0.7 倍であった。都城(12.0)保健所からの報告が多く、男性が約 9 割、女性が約 1 割で、20 歳代が全体の 52%を占めた。

e)メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant Staphylococcus aureus infection

報告総数は 368 人、定点当たりの報告数は 52.6 で、前年と同程度、例年の約 1.1 倍、全国の約 1.2 倍であった。70 歳以上が全体の 58%を占めた。

f)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant Streptococcus pneumoniae infection

報告総数は 15 人、定点当たりの報告数は 2.1 で、前年の約 0.7 倍、例年の約 0.2 倍、全国の約 0.3 倍であった。70 歳以上が全体の 60%を占めた。

g)薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant Pseudomonas aeruginosa infection

報告総数は 3 人、定点当たりの報告数は 0.4 で、前年の約 0.2 倍、例年の約 0.4 倍、全国の約 0.6 倍であった。いずれの患者も 70 歳以上であった。

h)薬剤耐性アシネトバクター感染症

Multidrug-resistant Acinetobacter infection

報告はなかった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち、結核は県内全域から、1 歳から 98 歳まで幅広い年齢層で報告された。特に 70 歳以上の高齢者が全体の 56%を占めており、今後の動向に注意が必要である。また、風しんは全国的な流行に伴い、県内でも全数把握対象に追加された 2008 年以降最も多い報告数であった。

この流行は、風しんの定期予防接種制度の影響²⁾を受けているものと考えられ、予防接種を一度も受けていない患者が全体の36%、接種歴不明は56%を占めた。重症熱性血小板減少症候群の報告数は全国で愛媛県に次ぎ2番目に多く、今後流行発生状況の把握に努める必要がある。

定点把握疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は、前年と同程度、例年の約0.9倍、全国の約1.5倍であった。特に、咽頭結膜熱の定点当たりの報告数は前年の約1.9倍、例年の約2.3倍、全国の約3.1倍と多く、流行の年であった。

眼科定点把握対象疾患のうち、そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は、前年、例年及び全国より多かった。本県は例年全国より報告数が多い傾向にあり、今後も動向に注意する必要があると考えられる。

基幹定点報告疾患は前年、例年及び全国と比較して少なかった。無菌性髄膜炎は、前年及び例年より2倍以上と増加したが、全国と比較すると約0.9倍と同程度であった。

月別報告対象疾患の性感染症の報告総数は前年と同程度、例年及び全国の約0.8倍とやや少なかった。

調査結果から、疾患によって流行発生時期や地域差、年齢差等があることが分かった。このことを受け、今後も引き続き、感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い、感染症の発生動向に細心の注意を払うとともに、若年齢層及び乳幼児を持つ保護者を中心に、適切な情報の提供と感染予防のための啓発を行っていく必要があると考えられる。

備考)

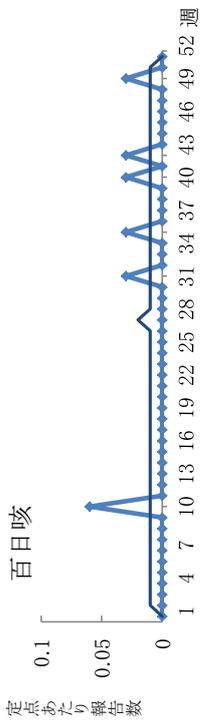
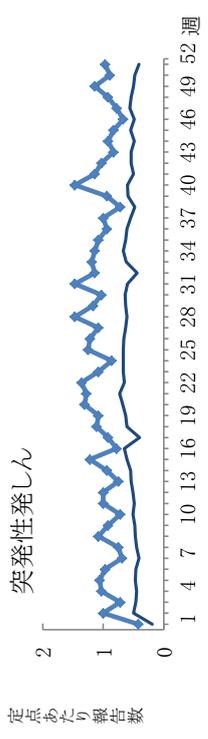
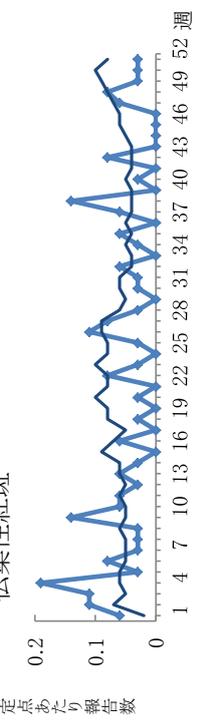
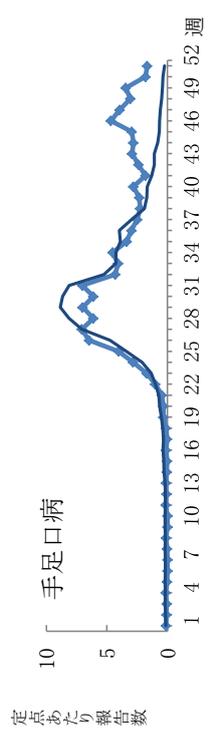
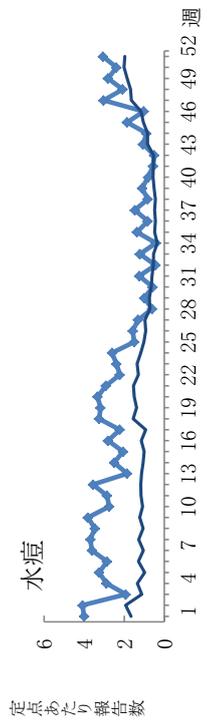
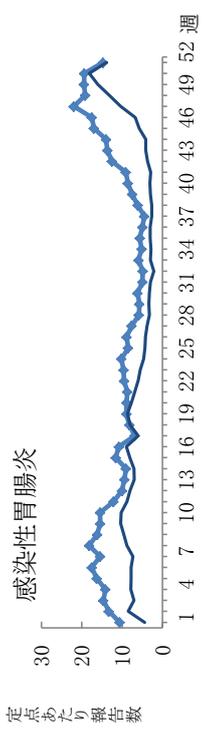
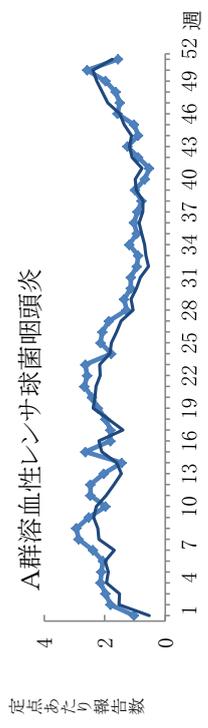
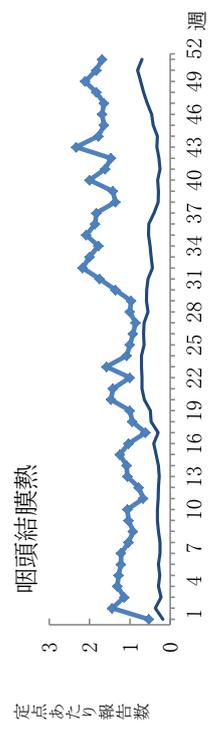
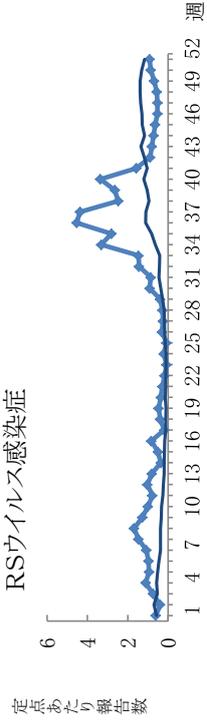
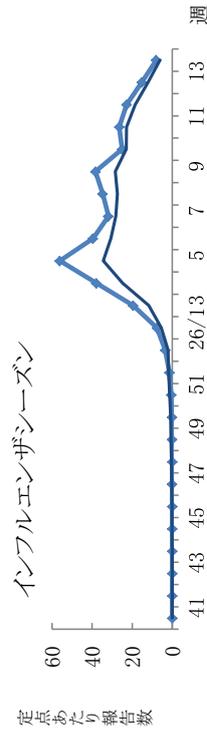
感染症発生動向調査事業は、患者情報と病原体情報から構成されており、当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

文献

- 1) 厚生省保健医療局長通知：感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について、平成11年3月19日健医発第458号。
- 2) 国立感染症研究所：〈特集〉風疹・先天性風疹症候群，病原微生物検出情報 IASR2013 年4月，Vol.34 No.4(No.398)，1-4，2013

表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要（宮崎県，2013年）

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合				過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2013年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)	昨年比 (県内2012年) (%)	昨年比 (%)		
インフルエンザ	21774	369.1	10歳未満	61	139	100	131	
RSウイルス感染症	2015	56.0	3歳未満	93	86	96	182	
咽頭結膜熱	2561	71.1	1歳～4歳	67	187	228	306	
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3223	89.5	3歳～6歳	60	71	80	111	
感染性胃腸炎	20900	580.6	1歳～3歳	42	92	100	170	
水痘	3949	109.7	1歳～4歳	74	96	82	197	
手足口病	4044	112.3	6ヶ月～3歳	86	180	107	116	
伝染性紅斑	80	2.2	6ヶ月～1歳	36	63	11	69	
突発性発しん	1890	52.5	6ヶ月～1歳	91	93	90	184	
百日咳	7	0.2	6ヶ月～1歳	86	50	6	37	
ヘルパンギーナ	1314	36.5	6ヶ月～3歳	84	41	56	121	
流行性耳下腺炎	587	16.3	2歳～5歳	62	34	20	125	
急性出血性結膜炎	2	0.3	5歳未満	50	50	100	34	
			40歳代	50				
流行性角結膜炎	895	149.2	10歳未満	33	162	139	493	
細菌性髄膜炎	4	0.6	0歳	50	100	71	60	
無菌性髄膜炎	33	4.7	5歳未満	64	275	206	171	
マイコプラズマ肺炎	25	3.6	10歳未満	72	26	56	15	
クラミジア肺炎	1	0.1	30歳代	100	33	11	9	
感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)	0	0.0	-	-	-	-	-	
性器クラミジア感染症	253	19.5	20歳代～30歳代	69	94	78	74	
性器ヘルペスウイルス感染症	67	5.2	20歳代～30歳代	67	84	87	57	
尖圭コンジローマ	18	1.4	20歳代	44	78	54	23	
淋菌感染症	82	6.3	20歳代	52	117	80	65	
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	368	52.6	70歳以上	58	103	108	124	
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	15	2.1	70歳以上	60	65	16	32	
薬剤耐性緑膿菌感染症	3	0.4	70歳以上	100	18	39	64	
薬剤耐性アシネトバクター感染症	0	0.0	-	-	-	-	-	



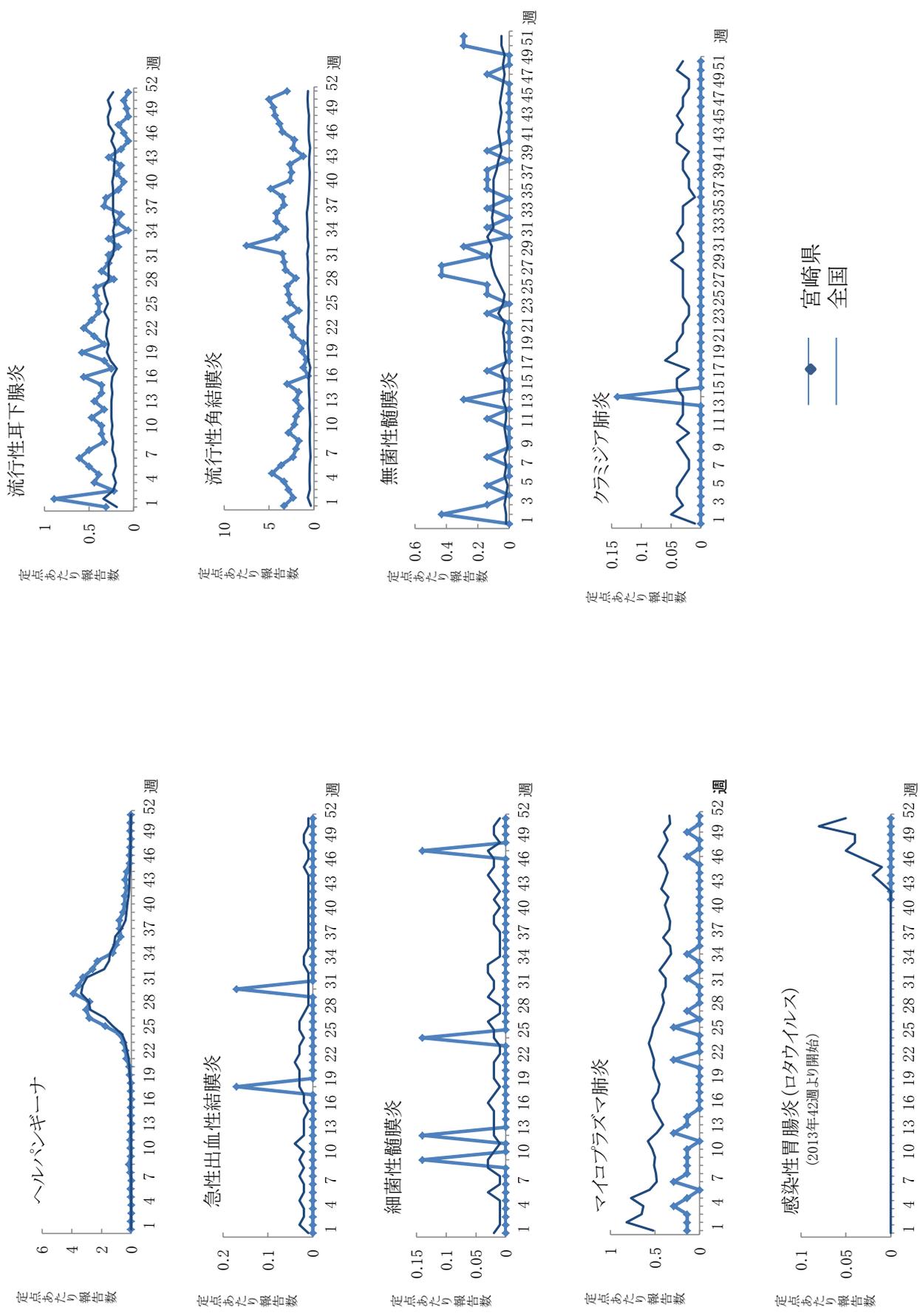


図1 定点把握対象疾患（週報告対象）の定点あたり報告数の週推移（経時発生状況）